

特245  
639

ふたば

越智郡教育委員会編



始





糸本

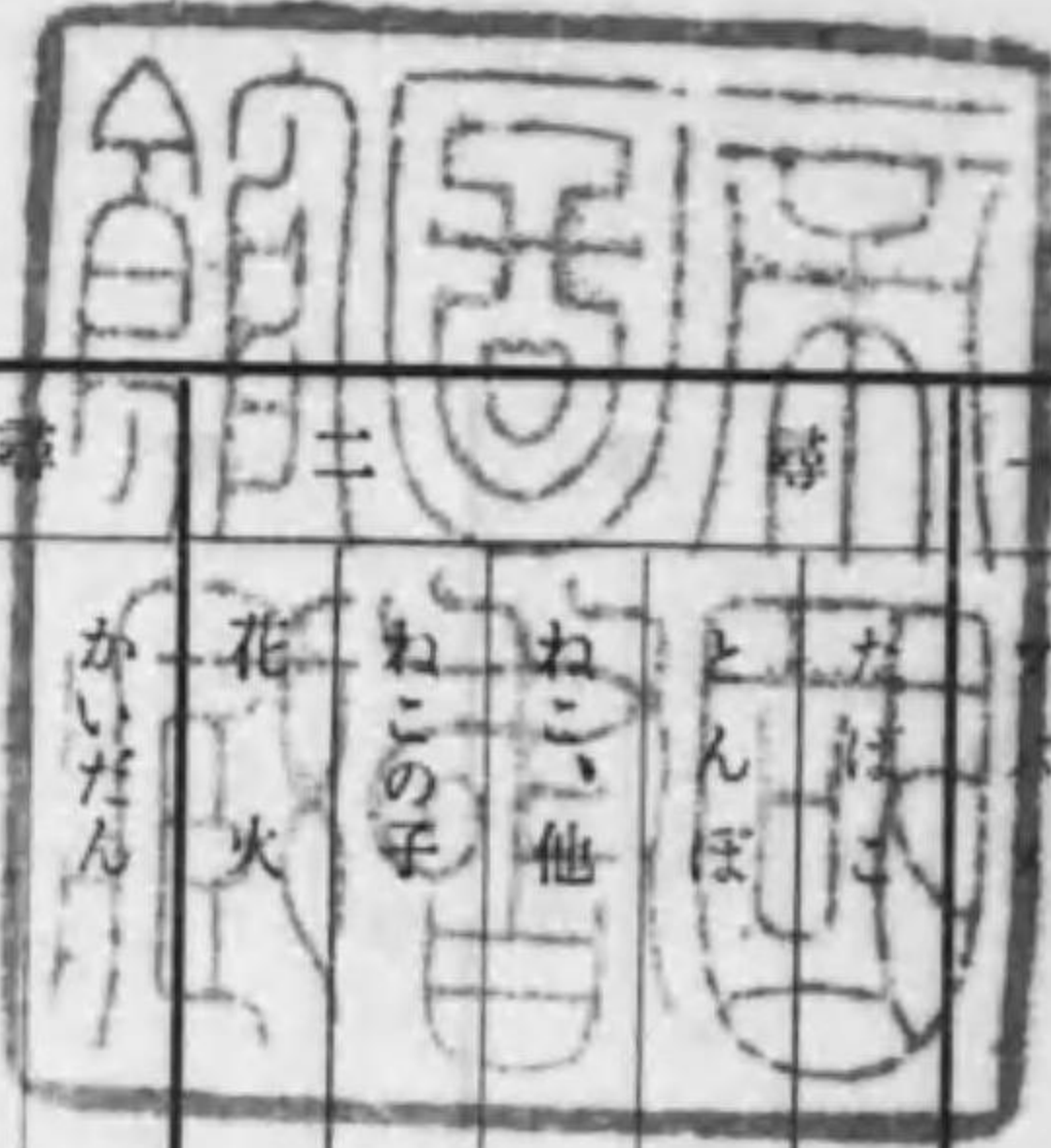
特245  
639

ふたば

越智郡教育委員会編



特245  
639



三		二		一		尋	
つゆ	つばき	くものす	にはとり	かいたん	花火	ねこの子	ねこ他
青山英朗 一二	阿部幸江 一一	二宮房江 一〇	馬越厚子 九	渡邊純二 八	谷口ヒデミ 七	村上清香 六	アベサチエ 五
						袖山定雄 四	榎垣幸男 三
							谷本イワヲ 一
							タンチレイコ 二
五		四		三		尋	
運動場のくすの木	静かな朝	おかあさん	暑い麦かり	田植え	春さき	小さいゆうびんさん	あせ
青井多喜代 二五	渡邊修 二四	鳥生聖子 二三	廣川安太郎 二二	横田澄榮 二一	安野鹿義 二〇	黒瀬美恵 一九	兼近貴美子 一八
							霧 松本悦子 一七
							田んぼ 芝田ミサ子 一六
							ぎやうずる 森勇 一五
							木の葉 稻垣幸子 一四
							ゆふだちの後 越智雅子 一三









オヨギ

尋一 谷本イワヲ (友浦校)

ボクハオヨイダ

トモダチト

セノナイハウデ

セイヲシタ

—青野 安指導—

ツバメ

尋一 タンヂ レイコ (上朝倉校)

ツバメサン

オハナシシヨルノ

「デンキバシラタカイナ」

「オトロシイナ」

「オカアサンオトロシイ」

トイヒヨルノ

—田窪カズヨ指導—



たばこ

尋二 檜垣 幸男 (伊方校)

三

かんそうをしてみると  
えんとつから火が出た  
たばこのいろは  
こげはすまいか

——阿部ヒロイ指導——

とんぼ

尋二 柚山 定雄 (菊間第一校)

とんぼ  
とぶく  
きれいな空を  
すい〜とんでる

——白石清敏指導——

四



ねこ

尋二 アペサチエ (九和校)

けふは日よう暖い ねこはぬくさうに眠つてゐる

ひばり

ひばりがないてゐる ぴいちくくなくないてゐる

くも

くもがかきの木にすをはつてゐる きれてもくはつてゐる

—大野トヨ子指導—

ねこの子

尋二 村上 清香 (瀬戸崎校)

ねこの子生れた

うれしいな

にやあくないた

うれしいな

またなきまたなき

うれしいな

—濱田保友指導—



花 火

尋二 谷口ヒデミ (日高校)

ドーン バチバチ

と花火がなりました

私が出て見たら

はやきえてゐた

— 山脇浅枝指導 —

かいだん

尋三 渡邊 純二 (東伯方校)

皆がかいだんかける音

ごとく

ごしく

ごとごと

皆がかいだんかけた後

なゝめになつた

まごのかげ

— 立花信行指導 —



にはごり

尋三 馬越 厚子 (伊方校)

九

にはごりになを

たべさす

なをつつく

つゝくまに

とつてくる

——井門梅太郎指導——

くものす

尋三 二宮 房江 (乃万校)

くものす風に吹かれて

ぶらんこのやうで

おもしろい

——榎藤 毅指導——

一〇



つばき

尋三 阿部 幸江 (九和校)

一一

つばきがさいてゐる  
まつかなつばき  
下に二つ三つ  
落ちてゐる

——高島サトヨ指導——

つゆ

尋三 青山 英朗 (富田校)

うめの木に  
つゆがたまつて  
星のやうに  
光つてる  
上のつゆが  
下のつゆと  
一しよになつた時  
さらつと光つた

——藤原廣美指導——

一二



ゆふだちの後

尋三 越智 雅子 (下朝倉校)

くもがすをはり出す

おにわの木からしづくがおちる

又青い空

—曾我部新逸指導尋—

木の葉

尋三 稻垣 幸子 (明日校)

木の葉がゆれる

風吹くとゆれる

そよ〜ゆれる

—藤原茂七指導—



ぎやうずの

尋三 森

勇 (龍岡校)

一五

お庭でぎやうずのすすしいなあ  
ばつしやんく

——玉井 始指導——

田んぼ

尋四 芝田 ミサ子 (乃万校)

田んぼをのぞく  
白い雲がうつつて居る  
白い雲がうごく  
ちつと見て居ると  
汽車にのつて居るやうだ

——大澤茂隆指導——

一六



霧

きりがふつてゐたので  
まる山が高く見えた  
だんだん近よると  
ひくく見えて来た

——大澤茂隆指導——

尋四 松本悦子 (乃万校)

あせ

体操の時間  
先生のひたひに  
うかび出た  
玉のあせが  
お日様に照らされて  
銀色に光つてゐた

——河上勝徳指導——

尋四 兼近 貴美子 (大井校)



小さいゆうびんさん

尋四 黒瀬 美恵 (岩城校)

一九

小人のゆうびんさん  
かばんがあるく

——品川守三郎指導——

春 さ き

尋五 安野 鹿義 (小西校)

そうつと通らう  
田では雲雀がさへづつてゐるし  
くろには百舌が止まつてゐるし  
逃げてはつまらぬ  
そうつと通らう

——小林茂隆指導——



田 植 ゑ

尋五 横田 澄榮 (乃万校)

三

残りの一枚

月夜になつて

植ゑてゐる

——山本 進指導——

暑い 麥 かり

尋五 廣川 安太郎 (柳井校)

さくくく

きれ味のよい

かまの音

かりたほした麥

向ふの赤土山のでつぺんを

赤い夕日がてらしてゐる

三



おかあさん

尋五 鳥生 聖子 (乃万校)

三

小さい子に

服を着せてゐるおかあさん  
頭の出るのをまつてゐる

——山本 進指導——

静かな朝

尋五 渡邊 修 (櫻井校)

どりごやに朝日がさした  
たまごが三つ  
光つて見える  
静かな朝だ

四



運動場のくすの木

尋五 青井 多喜代 (富田校)

二五

日ざかりの運動場

リレー勇まし

大木のくす

なんの苦もなく

雄大に

静かに

ゆれる葉

——藤原廣美指導——

あ り

尋五 越智 千萩 (大井校)

ありが石の下をくどつて

又石の上にあがつた

お日様があたつて

あたたかさうな石だつた

——角田寅三郎指導——

二六



飛行機

尋五 藤原高時 (明日校)

ふう〜と飛んで来た

飛行機

小さい子に

おらばれ〜

勇しく

飛んでいく

註 おらぶとは叫ぶことの方言

—藤原茂七指導—

夕立

尋五 小澤 勇 (櫻井校)

黒雲が走る

やがて雨だ

大つぶの雨が頭にあたる

何となく

ほこりつばいにはひがする



か  
に

尋五 波頭 淳子 (龜岡校)

二九

石垣の間から

小さい小がにの

足が見える

白いあをが

風にとぶ

註 あを——泡

——長野ミサヲ指導——

か  
わ  
ら

尋五 眞部 利夫 (乃万校)

若葉の間に

かわらが

日にてらされて

光つてゐる

——森 壽興指導——

三〇



海と空

尋五 光永 秀雄 (龜岡校)

海はみどり

空もみどり

海に浮ぶ白帆

空にただよふ白雲

皆しづか

——高野章雄指導——

日まはり草

尋五 宇佐見 幸恵 (富田校)

すくすくふとつた

日まはり草

朝日をむかえ

夕日をおくつて

さいてゐる

——藤原廣美指導——



賣られた牛

尋六 森 敏之 (九和校)

小牛が賣られていつた

うしろむきく

親牛も「もう」と一こゑないた

——越智和夫指導——

杉の芽

尋六 馬 越 勇 (東伯校方)

雨あがりの杉垣に

新しい芽が

槍のやうにとんぎつてゐる

杉の葉に手をふれるといたかつた

新しい芽を手をさすとまがつた

うすい緑の色がでてゐる

——越智優指導——



谷の秋

尋六 二宮 三郎 (櫻井校)

草の根を洗ひ

小砂を流して

谷間の川は

さら／＼と音たてゝゐる

どこかで百舌がなく

山もつゆでしつとりと

しめつてゐる

—飯塚芳夫指導—

春

尋六 近本 アヤ子 (櫻井校)

春がきたな

道のまん中に

小鳥がないてゐた

—飯塚芳夫指導—



雀

尋六 八木 タカヨ (乃万校)

夕日の中へ

飛び立つた數羽の雀

さへづり乍ら

風をおしのけるやうに

勢よく飛んで行つた

——森 壽譽指導——

夕 暮

高一 阿部 キサ子 (櫻井校)

しづかな庭に

ほのかな日ざし

櫻の小枝にみのむしが一つ

ぬれて下つてゐる

雨のやんだ夕暮



家

むかうに立ち並ぶ家  
山が高ひくになつて  
青い空が氣もちよく連つて行く

——大澤茂隆指導——

高一 楠橋 ハツミ (乃万校)

風

風がひゆうくと吹く  
木蔭にうづくまる雞の  
羽毛が風にさか立てられてゐる  
表の砂がまひくと空へ上つてゐる

——大澤茂隆指導——

高一 橋田 キヨ子 (乃万校)



草取り

高一 越智 キヨミ (乃万校)

熱湯の様な水には入つて

焼け付く様な日光を全身に受け乍ら

田の草をとる

汗が頬を傳つて

口の中に流れこむ

背をのばすと

ズーと向ふまで

道の小石が寶石の様に輝いてゐる

— 森 壽譽指導 —

朝

高一 大澤 貞子 (乃万校)

背高く伸びた煙草畑

朝早く

葉を折る音が

ぼさ ぼさと

静かさを破つてきこえてくる

— 森 壽譽指導 —



糸 卷

高一 八木 キヨカ (乃万校)

アッ!

丸い糸巻が手をすべつた

白糸が畳の上に

長く伸びた

— 森 詩譽指導 —

て ふ

高一 芝田 シズ子 (乃万校)

いがの花にとまつたてふ

ねむつてゐるやうだ

風がそつと洗つて通つた

註 いが あざみの花

— 森 詩譽指導 —



深呼吸

高一 越智 キヨミ (乃万校)

雀がさへづる氣持のよい朝  
若葉の香をかきながら  
大きな深呼吸をする

——森 壽譽指導——

草こり

高二 長野 信雄 (清水校)

ごろごろく  
今日は三段ころがした  
晩の御飯がうまかつた

——正岡繁一指導——



海邊

高二菅 貞光 (宗方校)

やけつくはまべ  
貝のかげが光る  
入道雲が高くそびえる  
ものにはひ高い濱邊

朝日

高二窪田 ミネ子 (清水校)

くわをかついだ  
百姓さん  
朝日が光る  
くわが光る

——正岡繁一指導——



夏の男の子

高二 村上光正 (生名校)

一 眞夏の光背にうけて  
海邊に濱にむれ遊ぶ  
濱の男の子の元氣さを  
波が語るかきらくと

二 青海原を勇ましく  
ぬき手をきつてつきすゝむ  
濱の男の子の元氣さを  
波が語るかきらくと

——福島良忠指導——

煙

高二 安永 テルミ (菊間第一校)

煙突から煙が出てゐる

もくく

もくく

どう見ても生きてるやうだ

会社の煙突からも皆揃つて

もくく

もくく

——竹原コナミ指導——



# 卷末小記

集るもの三十二校、五二三篇。數から言へば確かに成功に違ひない。

詩の香氣を全く忘れ去つた齒の浮く様な技巧にとらはれた現實放れのお伽噺の様な想像を超絶した空想の實感が忘れられ機智の尊ばれた頭で作られ感情の誇張された十年も昔に全盛を極めた童謡の殘骸。

こつ／＼大工きつ／＼き大工  
朝からこつ／＼何つくる  
こつ／＼大工きつ／＼き大工  
こつ／＼のみで家つくる  
こつ／＼大工のつくる家  
きつ／＼き大工の住む家は  
どんな家かとよく見たら  
高いくち木に穴一つ  
(尋六女)

この浮薄さと低調さと卑俗さと饒舌が見事に赤松氏によつて振り落されて。

あくまでも自由な表現形式の上にあくまでも自由な詩的精神をもつてあくまでも子供達そのまゝの姿に於てすべてに詩を見出さうとする  
児童詩の正道を征く二〇〇余篇から更に精選された本集五十篇、これこそ、明日の吾々の児童詩教育の出発点となるべきもの。

一体、吾々は詩に對して根本的な考へ間違ひをしてゐなかつたであらうか。  
韻文を詩であるとしてゐた考へ方  
散文を詩でないとしてゐた考へ方  
然し韻文に對するものは散文であつて決して非詩ではない。  
詩に對するものは散文でなくて非詩である。  
詩は韻文にも散文にもある。

非詩も韻文にも散文にもある。

韻文にしても散文にしてもその形式技巧に非ずしてものゝ見方如何にある。「詩魂」の有無にある。赤松月船氏の選評は、確かにこの根本的な点を斬つてゐる。吾々に児童詩指導の出発点を適確に明示して呉れてゐる。

今日の児童詩指導の上で、これらの二つの詩の行き方のどちらがより重要視されてゐるかと言ふ問題にぶつ／＼かるとすると、いふまでもなくそれは前者であり、つまり表はし方そのものゝ詩の働きを重視せず、感動の種類とか性質とか云ふものを大切に、同時に言語表現の素朴な自然性を尊ぶといふ行き方が全面的にそれをリードしてゐることが解る……えんとつから

むく／＼出だした煙  
五名のお姉ちゃんたち  
絲を取つてゐるだらう

そこに何等かの詩的技術が働いたらかういふ一見拙劣な、ぎこちない言葉の併列でない、もつと圓滑な、そしてもつと調和的な表現が執られ、そしておそらくもつと詩の全体が効果的に整つたであらう。しかし児童詩制作の目的がかゝる作品の完璧といふところになく、作者の生き方のより現實的な透徹といふ所にあるとすれば、即ち「詩による現實生活の陶冶」といふところにあるとすれば、さういふ詩としての完璧を重視するといふことは大して問題でない……。

(工程八月號 百田宗治氏)  
詩作は單なる技巧の上達を計るのみでなく、もつと重大な、心の育成、人格の練磨の必要がある。

「詩を作るより田を作れ。」

實際、理智を曇らしたり、生活逃避の精神を育てる詩、風月趣味の感傷に溺れ切つた詩なんか作るより、田を作つた方がどれだけよいかわからない。  
あらゆる藝術に於て、特に最近の文學に於て、能動精神に立つた文學、モラルを有つた文學がやかましく論ぜられてゐる。

生活と詩の合一へ！  
生活の中に詩を見出さしめ！  
詩を生活にぶつつけさせ！  
詩を作ることによつて、田を作る精神を一層醇化し、田を作る意欲がより深みをもつやうな詩をこそ、児童詩教育をこそ吾々は希求せねばならぬ。

本集五十篇、こと／＼くが自然觀照詩である。  
生活詩の建設へ！！  
こゝにも吾々が進むべき一方向の暗示がある。

嘗て詩を作る児童といへば、腺病質的なほそ／＼しい肉体を持つてゐた。僕たちの思念する詩作児童は頭健な身体を持つて居させたい。その健康な肉体に詩の心を宿らせたい。その意志的な、生活多な、詩の心を (稻村 謙一氏)

幸に、郡先輩有志綴方人に依つて、綴方誌の發刊が企てられてゐる相で、今まで忘れられてゐた綴方に——児童詩に澎湃として隆盛の機運が訪れた事を悦ぶと共に、こゝに導いて下さつた部會主腦部の方の今回の企に、綴方現役兵の一員として、滿腔の感謝を捧げ、本集を出発点として、児童詩の正道を共に歩みたいと念願するものである。

編輯を委囑され若輩暴言を吐く。  
敢て乞寛恕次第である。

八、二〇 森 壽譽  
大澤 茂隆



369  
74

委嘱された原稿に記入されてゐたもの。  
赤松氏の評点か。御参考までに。

あせ	霧	田んぼ	ぎやう水	木の葉	ゆふだち	つゆ	つばき	くものす	にはとり	かいたん	花火	ねこの子	ねこ	とんぼ	たばこ	ツバメ	オヨギ	題
兼近貴美子	松本悦子	芝田ミサ子	森勇	稲垣幸子	越智雅子	青山英朗	阿部幸江	二宮房江	馬越厚子	渡邊純二	谷口ヒデミ	村上清香	アベサチエ	柚山定雄	檜垣幸雄	タンジレイコ	谷本イワヲ	作者名
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○
																		黒丸 赤丸

家	夕暮	雀	春	谷の秋	杉の芽	賣られた	日まはり	海と空	かわら	かに	夕立	飛行機	あり	運動場の	静かな朝	お母さん	暑い麦刈	田植	小さい
楠橋ハツミ	阿部キサ子	八木タカヨ	近本アヤ子	二宮三郎	馬越勇	森敏之	宇佐美幸恵	光永秀雄	眞部利夫	波頭淳子	小澤勇	蔵原高時	越智千萩	青井多喜代	渡邊修	鳥生聖子	廣川安太郎	横田澄榮	黒瀬美恵
○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
																			優

風	草取り	朝	糸巻	てふ	深呼吸	草とり	海邊	朝日	夏の男子	煙
橋田キヨ子	越智キヨミ	大澤貞子	八木キヨカ	芝田シズ子	越智キヨミ	長野信雄	菅貞光	窪田ミネ子	村上光正	安永テルミ
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
										優

註 ●ハ三重丸

昭和十年八月廿七日印刷納本 非賣品  
昭和十年九月一日發行  
編輯兼 愛媛縣教育會 越智部會  
發行所 愛媛縣教育會 越智部會  
代表者 柚山瀧三郎  
今治市今治村三三三二  
印刷者 藏敷實男  
今治市今治村三三三一  
印刷所 共同印刷所



終

